

各関係機関長 様

佐賀県農業技術防除センター所長

普通期水稻(中晩生品種)における トビイロウンカの防除対策の徹底について

トビイロウンカの飛来・発生状況については、これまで7月27日付け病害虫対策資料第9号及び毎月の予報において情報提供してきたところですが、このたび、9月下旬に新たな飛来があったと考えられます。また、10月上旬の定期調査で、9月時点と比較して発生の増加が認められました。

については、下記事項を参考に、必ず各圃場での発生状況を確認し、防除対策を徹底するよう生産者への指導をお願いします。

記

1. 発生概況

- 10月1～2日に実施した普通期水稻の調査(34 圃場)では、トビイロウンカの発生株率は22.4%(平年25.0%、前年11.3%)であり、9月14～17日に実施した前回調査の0.8%(平年13.2%、前年2.6%)から急増した(図1)。発生の主体は長翅型成虫であり、発生が認められた株での寄生頭数は、株当たり概ね1～3頭であった。
- 隣県の予察灯での誘殺状況や県内圃場での発生状況から、9月27～28日頃に新たな飛来があったと考えられる。

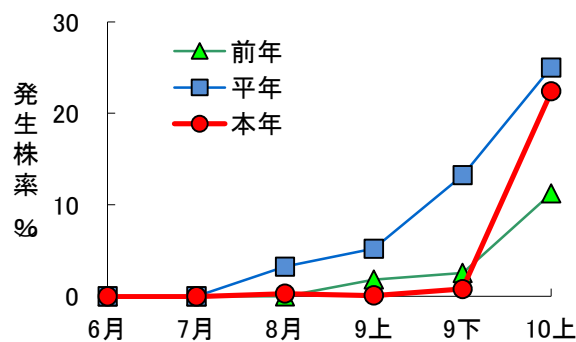


図1 普通期水稻でのトビイロウンカの発生推移

2. 今後の気象

福岡管区気象台が10月1日に発表した九州北部地方の1か月予報では、向こう1か月の気温は高いと予想されており、本虫の増殖・活動に好適である。

3. 防除対策

- 収穫適期を迎えた圃場では、計画的に収穫を行う。また、本虫による坪枯れの被害が出ており、収穫が間もない圃場では、収穫時期を早めることを検討する。
- 中晩生品種では、これまでの防除状況(薬剤の種類や防除回数等)に関わらず、必ず各圃場の発生状況を確認する。特に晩生品種(ヒヨクモチ等)では、10月の気温は平年より高いと予想され、次世代虫の増殖による被害を生じるおそれがあることから、発生予測図(図2)を参考に、幼虫がふ化する時期に発生状況の確認を徹底する。寄生密度が高い場合は、表1を参考に収穫前日数及び使用回数等の農業使用基準を遵守し、臨機防除を実施する。

- 3) 本虫は株元に生息しているので、**薬剤は株元まで十分かかるよう**、丁寧に散布する。
 4) 薬剤散布の際には、周辺作物への飛散防止に努める。

表1 トビイロウンカの本田防除剤（令和8年10月2日現在）

農薬名	有効成分	使用時期	有効成分を含む 農薬の総使用回数
エクシードフロアブル※	スルホキサフロル	収穫7日前まで	3回以内
エクシード粉剤DL	スルホキサフロル	収穫7日前まで	3回以内
エミリアフロアブル	フルピリミン	収穫7日前まで	2回以内
トレボン乳剤	エトフェンプロックス	収穫14日前まで	3回以内
トレボン粉剤DL	エトフェンプロックス	収穫7日前まで	3回以内

※地上散布において、展着剤としてミックスパワー、ササラ等を加用することで
 防除効果が安定する（総合防除計画参照）。

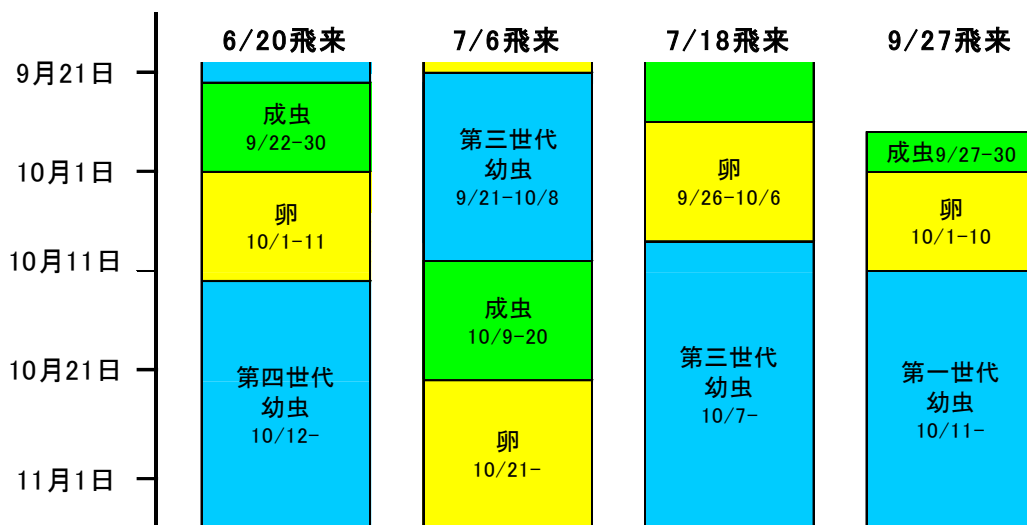


図2 トビイロウンカ各世代の発生予測（第4版、2026年10月2日作成）

- 6月17～20日頃（図では6月20日）、7月4～6日頃（図では7月6日）、7月16～20日頃（図では7月18日）及び9月27～28日頃（図では9月27日）の飛来虫を起点とし、トビイロウンカの有効積算温度及び佐賀市川副町のアメダスデータ（10月1日以降は平年値）に基づき作成した。三角法を用い、発育零点 12℃、発育上限温度 28℃、発育停止温度 33℃とした。9/27飛来虫については、10月1日時点で腹部が肥大した雌成虫を多数認めたため、卵期間を10月1日からとした。
- 田植え時期、品種、これまでの防除状況等の違いによって、本虫の発生量は異なるので、**必ず圃場ごとの発生状況を確認**したうえで、防除対策を講じる。

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病害虫防除部

〒840 - 2205 佐賀市川副町南里1088

TEL (0952) 45 - 8153 FAX (0952) 45 - 5085

Mail nougyougijutsu@pref.saga.lg.jp

ホームページ <https://www.pref.saga.lg.jp/kiji00321899/index.html>

病害虫総合防除計画 <https://www.pref.saga.lg.jp/kiji003101844/index.html>

防除センター

二次元コード



総合防除計画

二次元コード

